



哺乳・離乳からの口腔育成

きむ矯正歯科クリニック（愛媛県松山市） 金 俊熙

略 歴

昭和61年3月	長崎大学歯学部卒業
平成2年3月	鹿児島大学大学院歯学研究科博士課程修了
平成2年4月	鹿児島大学歯学部助手（歯科矯正学講座）
平成5年9月	宮崎医科大学医学部附属病院助手（歯科口腔外科）
平成7年4月	鹿児島大学歯学部附属病院講師（歯科矯正学講座）
平成8年9月	同上退職
平成8年11月	きむ矯正歯科クリニック院長
平成11年2月～	医療法人無窮会 理事長

子どもの口を健全に育てること（口腔の育成）の本質はしっかり筋肉を動かすこと（機能）です。咀嚼器官は運動器官であるので、運動器として発達を考える必要があります。

発達を考えるベースとしては、人間進化生態学と脳科学を統合して考えるべきです。人間進化生態学的な発達は動物学的、人類学的な進化の過程が基本になり、順序性があります。脳科学的な発達とは知性を育てることであり、その学習には適切な時期（感受性期、臨界期）があり、その時期を逃すと取り戻すのに苦労します。すなわち、適切な時期に適切な環境を整えることが正常に発達させる上で最も大切なことだと考えられます。

口の機能は哺乳から始まり、離乳期を経て、咀嚼へとつながります。今日の不正咬合の増加を考えると、日本におけるこれらの指導には問題が多いと言わざるを得ません。哺乳は乳房哺乳に優るものはありませんが、ほ乳瓶哺乳を行うときにはどのような点に注意すべきか話します。離乳とは親と同じものが食べられるようになることで、離乳期とは母乳と親が食べているものの両方を食べている時期のことですので、子どもだけが食べる離乳食は存在しません。1980年代以降、厚生省は「離乳の基本」（2007年「離乳の進め方の目安」に改定）を策定し、それを主体に離乳指導を行うようになったにもかかわらず、口の機能が上がったかと言えば、逆で、口の機能低下の象徴とも言える不正咬合は増加しています。運動器として考えると、筋肉のついていない歯は従属的であり、歯の有無で調理形態を変えることは発達の本質を見失うことになり、実際その通りになっています。

人類学的にヒトはこの1万年、ほとんど変化していないといわれております。離乳食を作って与えなければ子どもの口が育たないということはありません。口を育てることは子どもを育てること、食事の始まりは寐の始まりであることを、子どもの発達に応じてお話し致します。